

道心



禅昌寺通信「道心」第12号
編集 日光山 禅昌寺「道心」編集室
発行 平成16年1月15日
〒732-0002 広島市東区戸坂山根3-2-7
☎ 082-229-0618 ☎ 082-229-0822
E-mail : zenshoji@bronze.ocn.ne.jp
ホームページ http://www.zenshoji.org/

和える

山主 横山 正賢

禅寺の住職というのは昔から料理が上手ではないにしても作れる人は多い。その理由は小僧時代や修行道場での経験があるからだと思ふ。

今の時代は親の後を世襲して住職する寺が多くなったから、一昔前のように料理ができる禅僧は少なくなっている。

斯く言う私は小学校四年生の頃、母が病に伏していたからみそ汁の作り方や、大根や芋の皮むき、たくあんの切り方などを教わり煮しめ等は作っていた、その後学生時代には自炊をしたこともあるし、ボーイスカウトでの野外活動などを通して料理は下手ながら作る機会が多かった。曹洞宗宗祖、大本山永平寺を開かれた、道元禅師は料理することも仏道修行として、永平寺の台所係（典座）の為に「典座教訓」という聖典を遺しておられる、之を要約すると。

料理を調理（ととのえおさめる）するということは、献立を考へるときから、材料の取り合わせ、季節感、彩り、味覚のバランス、栄養のバランス等々への配慮、食材の一つ一つが持っている個性を生かす工夫、食材の皮や茎など残りのものも粗末にしない工夫、使った鍋釜布巾等の道具も納めるべきところへ調べて終わるまで、命を育む食の大切さを細かく説かれていた。

私は料理を上手に作ることは出来ない。しかし子供達が独立して広い山内に二人きりの生活（食事）が多くなったこの頃、日中は若い者がいるとはいえず、来客や電話の応対に忙しく勤める妻に、朝夕の食事を一人に任せておくのもどうかと、「慈悲」を説く立場の吾に目覚めたのか、典座への拘りなのか、本音は妻が先生で私が生徒という関係が穏やかに過ごせると思ふと、自然と台所に立つことが多くなった。

先日も三十数年ぶりで「胡麻豆腐」に挑戦した、客もないのに調理というのも気が重いから、婦人坐禅会と御詠歌の練習日に合わせて、数品を作りもてなした。お世辞にも美味しいといつて食してくれれば、又何時かという気分になさせてくれる。

昨年十月十一日土曜日には禅昌寺恒例行事となっている「Tsukimi（寺）の演奏会が開かれた、演奏はフルート・マンドリン＆鼓弓のジョイントコンサートだった。何れも国際的な演奏家とあつて。

小学一年生から九十六歳の方まで三百七十余名が一つになつてその音色に感動した。この演奏会の開催に当たつて宣伝のチラシ、チケット、当日のプログラムの制作まで、寺に集う人の手作りの奉仕である。会場の設営、照明・音響・会場案内・駐車場交通整理等々皆ボランティアで成り立っている。

演奏されるハーモニイは聴衆の心を、年齢・宗派・男女等々を超越して一つに陶酔させてくれる。天に月を戴いて言葉には言い尽くせない幽玄の世界を醸す。

演奏会の打ち上げは演奏者を交え、夜の更けるまで余韻に浸る。宴の料理はお粗末な和尚の手作りだが、名演奏に和えられて好評を得て又作りたくなる。さて次は何を作ろうかと考へるとき食材の一つ一つの持つ味や彩りが鮮明になる。料理のレパートリーを重ねる内にあくが強く、個性の強い食材ほど調理の仕方でも味が深いことに気づく。

日本料理には煮る・焼く・炒める・蒸す・和える等とあるが、中でも「和え物」は簡単なようで難しい、食感や味の異なる食材を取り合わせて、縁結び役の調味料を加えると、食材は互いに持ち味を生かしあつて滋味となる。

演奏会の合奏も音色の異なる楽器が互いに活かしあつて旋律を作り名曲となる。

人間社会もわしが、俺が、私がと自己中心は他を生かせないばかりか、自分に授かっている素晴らしい持ち味をも失つてしまふ。

夏の章 第7話



いちばん悲しいことが、 あなたを輝かせるのです。

愛知専門尼僧堂堂頭 青山 俊董



無量寺の庭の小さな池に、白とピンクの蓮が朝ごとに花を開かせ、訪れる人の心をなごませてくれております。ピンクの蓮は、数年前に知人からいただいた大賀蓮なのです。

千葉県検見川遺跡から発見された3個の蓮の実の1個が、故大賀博士の指導のもと、2千年前の深い眠りから醒めて発芽し、みごとに花を咲かせることができました。

それにならずさわった方々の、その時の感動はどれほどであつたらうかと、大賀蓮の花の開くのを眺めるたびに、私までも胸の高鳴るのを覚えます。2年前、お茶の弟子のKさんが、ぜひにというので株分けをしてさしあげました。

Kさんの家には立派な池があります。お寺からいただいた大賀蓮というので、Kさん夫妻は大切に大切に育ててくださいました。

ところが、1年経つても2年経つても、花はおろか、葉も茎も育たず、生きていたがやつというありさま。『どうしたのでしょう』と、Kさんが相談にきました。

Kさんの住んでおられるのは、美しく冷たい清水が豊かに湧き出しているところなのです。

Kさんの家もこの清水を利用して造られた池であることに私は気づきました。

「Kさんの池の水、きれいすぎるのよ。蓮は泥田のたまり水でなければならぬ。泥を肥料

として蓮の根を太らせ、たまり水は太陽熱をいっぱい吸収して柔らかく温かくなっていますから。面白いですね、清水では駄目で、泥田がいいというのは」

泥を捨てたら 美しい花は咲かない

高原陸地に 蓮花生ぜず
卑湿汚泥 この花を生ず
これはお釈迦さまのお言葉です。

乾燥した高原や陸地や清流には蓮は育たず、泥沼や泥田の中にしか、あの美しい花は咲かないとおっしゃっているのです。

「泥中の蓮華」といい「泥多ければ 仏大なり」といい、仏さま方が手に持つておられるものも、お座りになつておられる台座も、蓮華が多いことはどなたもご存じのとおりです。

昔から、仏の教えは泥中に咲く蓮の花にたとえて説かれてまいりました。ここで心して受けとめなければならぬ、2つのポイントがあります。

1つ目は、「泥に染まらないで」では、決してないということですよ。

時々、

「泥の中にありながら泥に染まらず、あの清らかな花を咲かせるように、人々も世の中の泥に染まらず、美しく生きましょ」

と説き、あるいは受けとめている方によく出会いますが、実際にはそうではないのですね。

そういう受けとめ方では泥は汚いもの、いとうべきものであり、それに染まらず、清らかに生き

る世界が別のところにあり、そこを求めてゆかねばならないような響きが感ぜられます。

いま、自分が住んでいるところ、家族、あるいは働いている職場を放り出してどこかへと探しに出かける姿勢である限り、よいところはどこにも見つからないのと同じように、泥を切り捨てたら美しい花も咲きません。泥が大切であり、泥あつてこそ初めて開く蓮の花なのです。

2つ目に心せねばならないポイントは、泥がどんなに大切で、泥がなければ花は咲かないといつても、泥イコール花ではないということ。泥はあくまで泥であつて、花ではありません。

泥をどう肥料として消化し、昇華して、美しい花を咲かせたらよいか。

貧しい自分の知識や経験の中だけでこの泥に對していたら、泥の中を堂々めぐりしているだけで出口は見つかりませんでしょう。

太陽の光や温かい水や空気や、多くのよき縁の助けによつて蓮が花咲かせるように、私たちもよき師、よき友、よき教えに導かれ、助けられることによつて、自分の中の、あるいは自分を取り囲む泥を肥料と転じて花を咲かせることができるのです。

煩惱を見据えてこそ、 悟りもある

仏教の言葉に、「煩惱即菩提」という言葉があります。

泥にあたるのが煩惱で、蓮の花にたとえられているのが、菩提と想つてくださればよいでしょう。

煩惱のないところ、悩みや苦しみや迷いのないところには、悟りも喜びの世界もないということ。かといつて苦しみや迷いが、「即」といつてもそのまま悟りでも救いでもありません。そこに質的な大転換がなされねばならないのです。

私の泥んこの底が 浄土の入口に なつていた

これは念仏行者、
榎本栄一さんの「泥んこ」と題する詩です。

百八の煩惱とか八万四千の煩惱などいわれて、泥に限りはありませんが、他人さまの泥を借りてきても仕方がありません。私の泥こそ大切であり、その泥は辛いほど、その苦しみに導かれてアンテナが立ち、聞く耳が開けるのです。

私にとつていちばん辛いこと、いちばん悲しいこと、いちばん逃げたいこと、そこが実は真実の救いの道への、仏道への入口なのです。

我が非を、我が泥を見据えるもう一人の私の目は、教えに出会い、導かれることによつて育てられるものであり、我が非、我が泥に気づく私は、すでに泥ではありません。闇を闇と知らしめてくれるのは光であるように、我が泥に気づく私は、泥をこえた浄らかな私なのです。泥んこの底がお浄土の入口であり、ど真ん中なのです。



まだ若い頃、農業にうとい私は、草は何でも捨てるものと思ひ、憎いものを除くような思いで抜いては捨て、抜いては捨てていました。

たまたま道を通りかかった篤農家のおじいちゃん、

「草は捨ててはもつたないよ。草を育てる養分も、作物を育てる養分も同じなんだから、捨てずに土に埋めておやりなさい。草はそのままにしておくと、のさばつて作物を駄目にしてしまうけれど、土の中に埋めてさえやれば、よい肥料になるからね。」と、親切に教えてくださったことをいまも忘れません。

田の草を とりてそのまま こやしかな
とか、

しづ柿は しづがあるとして捨てるなよ
そのしづさゆえに 甘くなる

などと、日本でも昔から諺として教えられてきました。

稲を育てる肥料も、雑草を育てる肥料も同じなのです。雑草を野放図にしておけば、稲を駄目にしてしまいます。その雑草も抜いて地中深く埋めてやれば、稲を育てる肥料となるのです。

無量寺に咲いた蓮の花を見るたびに――苦に導かれて教えに出会い、教えに照らされることによつてもう一人の私の目を育て、私の泥んこに気づかせていただき、やがてその泥を転じて、私なりの花を開かせてゆきたいと思つてのことです。

※ 本文は、青山俊童尼老師著

「悲しみはあした花咲く」光文社より
抜粋したものです。

「四国八十八箇所」(第一次) ご巡拝の旅

私の「四国八十八箇所」巡拝

茅原 愿

十一月十五日朝、JR安芸矢口駅6時01分発の列車に乗るべく家を出る。7時、新幹線口バスタ―ミナルを出発して、一路四国・鳴門市の一番札所「靈山寺」へと向かう。

け、初めに本堂(ご本尊、次に大師堂(弘法大師))に参拝、読経し御本尊真言と御宝号をそれぞれ三回唱和する。
二、五番札所と順次バスに揺ら

予定を繰り上げ七番・八番霊場を先に済ませ、午後四時半頃に初日最後の六番札所「安楽寺」に着く。巡拝の後当寺の宿坊で靴を脱ぐ。温泉のある宿坊である。

入浴・食事を済ましてから「安楽寺」本堂に入室して、全員で「般若心経」一卷を勤行した後、住職の法話を聞く。「安楽寺」の由来、巡拝の功德、作法の他に宝物(佛像・曼陀羅)を見学させていただく。

二日目(十六日)は、心配した天候も晴れて、朝7時30分宿房の皆さんの見送りを受けて出発、巡礼も二日目となれば、少し余裕が出来お遍路さんの気持ちに浸って行く。

一行で歩くときに鳴る持鈴の響き、小鳥の囀り・周囲の風景が調和した風情は、将に同行二人(御大師さまと)過去・現在・未来に亘り、此の道、此の坂を歩いた・歩くであろう人々の思いと重なり、無心のうちに、情景を想像する。心が素直になつていく様で歩き遍路もいいなと思ったりする。

十番札所「切幡寺」333段の石段、十二番札所「焼山寺」の二寺が、印象に残った。山深い処のお寺は、道中に考える時間があり、趣がある。「切幡寺」の説話は機織

の少女と、弘法大師との出会いに纏わる話が、お寺の縁起である。布施の功德の鑑である。「焼山寺」は、八十八ヶ所の中でも標高の高い場所(938mの八合目)で、今は車が近くまで入るので徒歩で500mくらいであるが、樹齢300年の杉林の参道を歩く巡礼者のじれい持鈴の澄んだ音色と木立から漏れてくる日射しの中での人々の姿が、清々しく感じられる。千二百年前に万人を救う方便究竟の世界を四国の地に開拓された弘法大師の偉大なる業績に思いを馳せ、多くの人々が遍路に訪れる所以を思いながらの巡礼であつた。

この度の巡礼は、十二番札所「焼山寺」が最後で、午後二時過ぎ帰途についた。帰りのバスの中で一行の皆さんの顔が、御大師様のところを受けてか何となく、穏やかで福々しく見えたのは、私だけであつたろうか。

JR広島新幹線口に午後六時三十分に着く、同行の皆さんと次回参加を楽しみにお別れする。今回、禅昌寺特別企画「四国八十八ヶ所巡礼の旅(1・12番)に参加出来たこと、又、同行(三十二名)の皆様へ感謝申し上げます。合掌。



一番札所「靈山寺」

十二番札所「焼山寺」

十一番札所「焼山寺」

読経を重ねての巡礼である。

それうちに、隣の席の人とも馴染みが出て、四方山話を聞く。一行の中には数回の巡拝経験のある人(白髪とか)も居られ、徒歩巡礼・自家用車巡礼等様々な形での遍路、熱

心で信仰の厚い方が居られる。

第一日目の行程は順調にすすみ、

近くの巡拝用品専門店で、予約していた巡拝必需品(頭陀袋・白衣・金剛杖等)を購入し、昼食を済ませていよいよ一番札所「靈山寺」の山門をくぐる。

宗賢さんから、お参りの作法(口漱ぎ・巡拝ローソク・線香・納め札・お賽銭・読経)の指導を受

年頭所感

東区 平田 喜身夫

皆様、おめでとございます。

今年も多事多難な年の幕開けとなりました。イラン・イラク・パレスチナ等々世界の情勢を見る時、平和を求めるべき宗教が争いの原因となり、幸福を追い求めてきた文化又は科学が環境破壊を引き起しています。常に相手以上の物を求めて競争し、力で押さえつけようとする利権の衝突から戦場となり、テロが起きます。このような悪循環を繰返しています。なぜそのようなことになるのでしょうか。

その根本原因に、我良し、とする各国のエゴがあるように思います。これを断ち切り改められるのは、仏教の「利他先」の思いやりの心以外無いと思うのですが。そのような中で日本はどうか。犯罪の急増、経済の停滞、北朝鮮との関係等色々難しい問題を抱えているにしても、街に出れば物が溢れ、自由があり、平和が保たれてきました。それが今、自衛隊派遣で大きく揺れています。米国との友好関係、憲法九条に違反、テロの恐怖、私達は再び日本が戦争に巻き込まれぬよう、しっかりと物事を判断し、見てゆかねばと思います。

ます。では私に何ができるかと云うと、何の力もありません。せめて自分の周りだけでも、明るく楽しいものになりたい。常に笑顔を忘れないで、どんなに小さなこと

でも、良いと思うことは進んでやり、人に協力し、感謝の心を忘れず、我利の心を少しでも無くしてゆきたい。そして戴いているこの如来の御命を大事にして行く。

これが年頭にあたり私が思ったことです。

近頃はめつたにペンを執ることもありません。このような惚け防止の機会を与えて下さった和尚さんと道心会に感謝致します。 合掌

トイレ掃除

NPO法人 松笠山の会事務局 奥村 浩三

毎週日曜日は、裏山の松笠山に登り一日を過ごします。松笠山に登る目的は、所属するNPO法人松笠山の会（松笠山の自然と歴史を守る会）が主催する登山道の整備や清掃を行うためと、松笠観音寺境内のトイレ掃除と運動不足解消のためです。

トイレ掃除は始めて2年位になります、山の上にあるトイレなの

で汲取り式のポットチャントイレです。まずは便器をタワシでこすり磨きます、その後トイレットペーパーの交換、最後はトイレの裏にまわり、汲取りを行います。（最初は大変勇気がいりました）

トイレ掃除を始めるようになったきっかけは、家内から聞いたちよつとした話です。

その話とは……

家を新築すると色々な神様がやって来て、最初に来る神様は一番良い部屋に入ろうと急いでくるため、金銀財宝の準備が出来ず身軽なまま来てしまいます。一番最後の神様が残ったトイレに入ります、ゆつくり来るので金銀財宝もいっぱい持って来るそうです。（トイレの神様はうすさま明王と

いう名前だそうです）そのためトイレをきれいにしていると、神様が喜びお礼をくれるという話です。

この話を聞いたあと、私の二人の子供（長女18才、次女15才）は毎日トイレをきれいにするようになりました。そのおかげかどうかはわかりませんが、親戚から予期せぬお小遣いをもらったり、家内

の習字の先生から思いがけないお小遣いをもらって、臨時収入を得ていました。

私もこれにあやかうと思いましたが、家のトイレは家内と二人の子供ががちりガード、そこで家のトイレはあきらめ松笠山のトイレを掃除することにしました。それまで松笠山のトイレは松笠山の会の会員が2ヶ月に一度掃除と汲取りを行っていたのですが、毎週掃除をするといつもきれいな状態となり、登山者からも喜ばれるようになっていきます。ちよつとしたことなのですが……

以後、登山者からはきれいなトイレがあるので安心して登れる、松笠山のファンになりましたという言葉も頂いています。

家内がこの話を仕入れた本にも旅館のトイレをきれいにしただけでお客が増えたと書かれていました。多分、人が衛生に一番気になるトイレをきれいにし、一番嫌がるトイレ掃除を行うことで何か呼び込まれることがあるのではないかと思います。

私もトイレ掃除を始めて2年になりますが、この2年間、私が勤める会社の中で担当する広島支店は、昨年は20支店ある中のMVPを獲得し、今年も連続してMVPが取れそうです。これもトイレ掃除のおかげでしょうか。うすさま明王様ありがとございます。

◆道心・趣味の会◆

詩

天地一杯
光の中を
今今を
梅は梅 桜は桜

天地一杯
恵みを受けて
今今を

菊は菊 紅葉は紅葉

天地一杯
救いのもとに
今今を
神は私を 私に神に

天地一杯
慈愛に満ちて
今今を
仏は私 私に仏

短歌

●奥山に神宿らんと訪う社
ツセは山に「幸い」尋めき

●比治山にあそびにし
彼の少女の日へ

ある日一氣に駆けもどりたき

東区 矢野淑子

俳句

●暁天の きらめく星座 臘八会
●夜咄の 茶会に侍る 関山忌

東区 青笹 俊枝

●冬桜 仰ぎそれそれ 何か言ふ

●石見路に入るやたがはず時雨けり

東区 河野 貞女

◆行事報告◆(十月～正月)

●十二月十四日に行われた年末大掃除
では四十余名の方が参加されまし
た。家族お揃いでのご奉仕有難うご
ざいました。

●平成十六年元旦の年頭祈願法要は、
晴天に恵まれ家族連れの参拝者で賑
わいました。

◆行事案内◆(二月～四月)

■毎週定例行事

●暁天坐禅会

月曜日～金曜日

毎朝六時より四十分まで(四月か
らは毎朝五時十分より)

●水曜坐禅会

午後七時より坐禅・茶話会 終了
八時半

●婦人坐禅会

毎週金曜日午後一時より坐禅・茶
話会 終了三時(第一金曜日のみ
坐禅の後、写経、茶話会)

■毎月定例行事

●上田宗箇流茶道稽古日

毎月一回 第三金曜日を予定 午
後二時から

※お抹茶と和菓子を気軽に楽しむつ
もりでのご参加ください。

●御詠歌の会

第二金曜日午前十時より自主練習
第四金曜日午前九時より講師を招
いて練習 昼まで

◎茶道の稽古及び御詠歌の稽古は講
師の都合により変更する場合もあ
ります。

初めて参加される方は、お寺に電
話にてご確認ください。

●日曜坐禅会

第一日曜日 午前九時より坐禅・
茶話会 終了十時半

■毎年定例行事

●春彼岸法要及び護持会総会

三月十四日(日) 午前十時半より
法要・引続き総会。

■恒例行事

●青山俊重尼老師講演会
二月二十九日(日)

講座は午前十時半～十二時・昼
食・午後一時半～三時まで(坐禅
は九時より)
会費 二千元(午前のみ午後のみ
の方は千円) 昼食代一人・百円
※昼食は持参されても結構です。
(お茶はこちらで用意いたします。)
◎昼食が必要な方は必ずお電話にて
申込みください。

四国八十八ヶ所ご巡拝の旅

●日時 三月二十七日(土) から二十八
日(日) まで

●行き先 四国八十八ヶ所・十三番大日
寺から二十三番薬王寺まで

●集合場所時間 二十七日午前七時・
広島駅新幹線口を出発。帰着は翌日午
後八時広島駅新幹線口を予定。

●参加費 一人二万三千九百円(納経
帳・軸・白衣は別途必要)

※旅行の参加申込み・お問い合わせ
はお寺までお知らせ下さい(詳し
いご案内をお送りします。)

申込み期限 二月末日

電話 〇八二二五九〇六一八

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣
味の短歌俳句など何でも結構です。
お寄せ下さい。次号原稿締切は、
三月末日までお願いします。